

絶滅危惧種アホウドリの再生：夢から実現へ

長谷川 博

東邦大学名誉教授

今、地球上でも日本列島でも、多数の生物種が絶滅の危機に瀕している。それらの絶滅危惧種を保全し、生物多様性を維持することは、われわれにとって緊急で重要な課題である。ぼくは 40 年以上にわたって、絶滅が危惧される大型海鳥アホウドリ (*Phoebastria albatrus*) の保全研究・活動を続け、ついにこの種の再生を展望することができるようになった。

この鳥は、伊豆諸島最南部の火山島・鳥島で 10 月から翌年 5 月にかけて繁殖し、北部北太平洋やベーリング海に渡って非繁殖期を過ごす。かつて羽毛採取のために 500 万羽以上も乱獲され、1949 年には“絶滅”が宣言された。しかし 1951 年に、10 羽ほど生存していることが確認され、再発見された。当時の総個体数はごくおおまかに二桁であっただろう。1960 年、この種は国際鳥類保護会議 (International Council for Bird Preservation、現 BirdLife International) によって、地球上で最も個体数が少なく緊急の保護が必要な“国際保護鳥”13 種のうちの一つに指定された (トキも含まれていた)。再発見以降、鳥島気象観測所の人びとによって繁殖状況の監視調査と保護活動が行なわれたが、1965 年に観測所が閉鎖され、調査・保護活動は途絶えた。

静岡の田舎で生まれ育ったぼくは、高校 1 年生の冬、木原均先生のカラコルム・ヒンズークシ学術探検についての講演を聴き、動物の野外研究を志望し、1967 年に京都大学農学部農林生物学科に入学した。しかし、まもなく大学闘争の時代に突入し、学部時代に専門的な勉強をする機会がなかった。それで、ぼくは大学院に進んでより深く学ぼうと決意し、理学研究科で動物生態学を専攻し、もっとも好きだった鳥類の生態学研究に熱中した。

保全研究のきっかけ

博士課程の大学院生だった 1973 年 5 月 7 日、伊豆諸島鳥島でアホウドリの繁殖状況を調査したばかりのイギリス人鳥類学者ランス・ティックル博士 (Dr. Lance Tickell) と出会い、強い刺激を受けた。しかし、すぐには行動に移せず、3 年後の 1976 年 11 月に初めて鳥島に近づいた。この時は上陸できず、船上から観察して繁殖つがい数を 40 組余りと推測した。翌 1977 年 3 月に初めて鳥島に上陸した。そのとき、ひなの数はわずか 15 羽で、総個体数は 200 羽未満と推測された。ぼくは、この海鳥を再生へと導くための保全研究を決意した。

幸運にも、この調査の直後に、東邦大学理学部の海洋生物学研究室に助手として職を得た。しかし当時、野生生物保護の研究は社会でほとんど注目されておらず、研究費の助成はなく、自分自身で調査資金を捻出する以外に方法はなかった。また、こうした研究は短期間に成果を得ることが困難で、人生を棒に振るリスクもあった。しかし、とにかく細々と調査を続け (初めの 3 年

間で、鳥島に上陸したのは2回だけ)、繁殖状況についてのデータを集め、どうにか保護計画を提案することができた。

繁殖成功率の引き上げ

最初の保護の取り組みは、急斜面にある劣化した営巣環境を改善し、繁殖成功率を引き上げて、巣立つひなの数を増やすことだった。ぼくの提案に沿って、環境庁と東京都は1981年と82年に営巣地にハチジョウススキの株を移植する工事を行なった。その結果、1984年度には51羽のひなが巣立ち、繁殖成功率は約67%に引き上げられた。しかし1987年に、営巣コロニーがある急斜面で地滑りが起こり、泥流が頻繁に発生してコロニーに流入し、繁殖成功率が再び低下した。これに対処するため、環境庁と東京都は1993年に大規模な砂防工事を実施した。さらに、砂防と植栽を軸としたコロニー保全管理工事を2004年まで継続した。コロニー保全管理工事の開始から5年後に繁殖成功率は以前の水準の67%を回復し、1997年度には巣立ちひな数が100羽を超え、翌1998年度には鳥島集団の総個体数が推定で1,000羽に達した。

その後も、ぼくは補完作業を継続した。その結果、従来コロニーで繁殖成功率は67%水準に維持され、2017年度にはここから390羽のひなが巣立った。

新コロニーの形成

第二の保護課題は、地滑りのおそれのない安全な斜面に、従来コロニーから巣立った若い鳥を誘引して新しいコロニーを形成することだった。2年間の準備を経て、1992年度から島の北西側にある緩やかな斜面にたくさんのデコイを並べ、録音した音声を再生して若い鳥を誘引した(Stephen Kressの社会的誘引法)。開始から3年後の1995年に最初のつがい1組が産卵して、ひなが巣立った。こうして第一関門を突破したものの、その後、つがい数はなかなか増えなかった。試行錯誤を繰り返し、開始から12年後の2004年度に4組のつがいが産卵して、新コロニーが確立した。その後、当初の予測通り、従来コロニーから若い個体がつぎつぎに移入して、新コロニーは急速に成長し、2017年度には341組が産卵し、267羽のひなが巣立った。

この新コロニーは緩やかな斜面にあり、ここでの繁殖成功率は平均して75.3%で、同期間における従来コロニーでの繁殖成功率65.7%よりかなり高い。したがって、この新コロニーが成長するにつれて、鳥島集団の繁殖成功率は少しずつ改善されるはずである。

小笠原諸島への再導入

こうした積極的保護計画が奏功し、2007年度に巣立ちひな数が200羽を超え、鳥島集団の総個体数は約2,000羽に到達した。その年度から、アメリカ合衆国魚類野生生物局・環境省・山階鳥類研究所によって、鳥島からひなを非火山の小笠原諸島聳島列島に再導入して、繁殖地を復元する第三の保護計画が始められた。2008年から2012年まで、合計70羽のひなが聳島列島に運ばれて野外飼育され、69羽が海に飛び立った。

開始から6年後の2014年、鳥島から運ばれた個体と鳥島から自発的に移住した個体がつがい

を形成し、ひな 1 羽を育てた。その後、さらに 4 羽のひなが巣立った。また、2018 年には聳島列島から最初に巣立ったひなが聳島列島に帰還した。ここに核となる繁殖集団が確立すれば、いずれ個体数が増えた鳥島集団から移住が起こり、繁殖集団が成長するにちがいない。

鳥島集団の将来

過去 39 年間、鳥島集団の繁殖成功率は平均 60.8% で、集団は平均して年率 7.72% で指数関数的に成長してきた。これは 9.32 年で集団が倍加すること意味する。調査期間の後期に当たる最近 13 年間をとれば、繁殖成功率は平均 68.1% で、集団の成長率は毎年 8.98%、倍加期間は 8.06 年となる。

昨年度、鳥島では 921 組のつがいが産卵し、688 羽のひなが巣立ち、鳥島集団の総個体数は推定で 5,165 羽になった。間違いなく、今年度の繁殖つがい数は 1,000 組に到達するであろう。さらに、繁殖地である鳥島の陸上環境や採食海域である北太平洋の海洋環境が大きく変化しなければ、8 年後の 2026 年ころには鳥島集団の繁殖つがい数は 2,000 組、総個体数は 10,000 羽になると十分に予想される。間違いなく、この種は再生への道を歩んでいる。

そしてぼくは、この種の再生を機に、和名を「アホウドリ」（信天翁、阿呆鳥、阿房鳥）という失礼な名前から、「オキノタユウ」（沖の大夫）という尊敬の念をこめた名前に改称することを提案する。

鳥島の位置と営巣地

1. 鳥島の位置

30°29'N, 140°18'E



2. 営巣地

(アホウドリの営巣地)

